

史書

#3

かまくらおおにつき

鎌倉大日記

作者: 不詳

成立: 応永初年(1394-)頃



解題

Keyword

- 鎌倉公方
- 武家年表
- 「喜連川判鑑」
- 「鎌倉大草紙」
- 「家傳年代記」
- 喜連川家
- 「鎌倉年代記」
- 判鑑
- 「鎌倉九代後記」

室町時代、鎌倉公方足利氏を中心にした武家年表。伝本によりその記載期間は、治承4年(1180)から永享11年(1439)までと、天文8年(1539)までとがある。

『喜連川判鑑』『鎌倉大草紙』(#9)などとともに、室町期の関東の動静を記した数少ない史料として貴重。

■ 成立経緯

本書には、生田本と彰考館本の2系統がある。このうち彰考館本が一般に流布し、江戸幕府編纂『後鑑(のちかがみ)』にも採用されたが、現在では生田本が原態に近いと考えられている。

生田本は、生田美喜蔵氏所蔵本『家傳年代記、頼朝公以来判鑑』として確認されたもので、明治初年までは喜連川家に伝わった。喜連川家は関東足利家の末裔であり、この伝来から生田本の信頼性の高さが指摘される。生田本は、筆跡や内容から、応永初年頃に既存の年代記(『鎌倉年代記』(#2)?)を手本に足利将軍と関東足利氏を加えた年表として作られ、これを応永20年代頃(1413-1422)に書写し、永享11年頃まで追筆したと思われる。

一方の彰考館本は、生田本より後の写本である。その間に、誤脱が生じ全くの異本となっている。『鎌倉大日記』(以下『大日記』)の書名は彰考館でつけられたものと推察される。

■ 内容

生田本は、治承4年から永享11年まで記される。巻本の形態で、表は縦横に罫線を引き、関白・将軍・執権・六波羅探題・政所・問注所の6項目を記載。建武以降は将

軍の次に京都管領・関東公方・関東管領が加えられ、略歴などが注記される。それぞれ補任から改任・死没の年まで線が引かれている。各年の裏には、その年の重要な出来事が記載され、表裏一体で年表の形式を成している。全体に記事が豊富で、かつ比較的正確と評される。また、将軍・執権・管領などの花押が記入され判鑑の役も果たしている点が、本書の特徴である。

生田本系統の伝本は生田家所蔵のほか石井國之氏所蔵本がある。これは生田本からの書写と考えられ、生田本の欠損部分を補うことができる。

彰考館系統の伝本は、治承4年(1180)から天文8年(1539)まで記される。冊子体の形態で、生田本にはない永享11(1439)年から明応5年(1496)頃までの記載事項が非常に多い。しかしこの伝本には誤りも多い。臼井信義「鎌倉大日記について」によれば、これらの誤りは『鎌倉大草紙』の記述に一致するという。このため『鎌倉大草紙』は彰考館本の『大日記』を参照して成立したと考えられる。一方、同時代の史書である『喜連川判鑑』『鎌倉九代後記』などは生田本『大日記』を参照したと思われる。このように、室町初期の史書は、生田本・彰考館本いずれの系統の『大日記』を参照したかにより、明らかに二分されると指摘される。

■ 諸 本

生田本系統は、生田家、石井氏所蔵の2本が確認されている。『神奈川県史編集資料集4』凡例によると、生田本の写真版が鎌倉国宝館および東京大学史料編纂所に所蔵されており、このうち後者(昭和27年5月撮影)は、裏書欠損部分に石井國之氏所蔵の伝本による校正が加えられている。

一方、彰考館本は、その伝来によりこの呼称があるが、これは戦災で焼失した。現在は、宮内庁書陵部、国立国会図書館などで所蔵される。また内閣文庫所蔵にも2本所蔵されるが、ともに天正17年(1589)まで記されている。



史料本文を読む

<翻刻本>

生田本系

- 『鎌倉大日記』神奈川県1972 (神奈川県史編集資料集 第4集)
[K27/33/4] (索引(人名、地名等固有名詞)あり)

彰考館本系

- 『鎌倉大日記』頼朝会 1937 [K24.4/5]
- ◆ 「鎌倉大日記」(『増補続史料大成』別巻 竹内理三編 臨川書店 1979 [K24/134])



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆ 臼井信義「史料紹介 鎌倉大日記について」(『歴史地理』vol. 84(2) 吉川弘文館 1953 [Z210.05/5])